



遠13
1835
3

再岡高基梅卷之三



おえん実母の各系遠人伝

栗杖亭鬼卯著

うらておえんをわしおもさひやうよりきれば大はほび尼よひ
ふしぎ不思後のお縁をわしおもさひやうよりきれば大はほび尼よひ
忘まごころ赤さよりやうよりきれば大はほび尼よひ
似合ぬやさきお向一橋のくけ一河乃流も他生乃縁と園ほ
てやかくお宿中も源を因縁をうらめおおのつぎまうらやしとね
るよさればおら大坂産まふよ源をねいりて今お川
後ほいしお系定お父もまもるまもるまもるまもるまもるまもる
小おさく先ま親乃事のとまもるまもるまもるまもるまもるまもる

高基梅卷之三

厄をりくと静に申さるるくとも軽く扱ふもさうりし
 かやつとくぬ物ごとりとすよつけ大坂生息と笑はるや
 又も大坂にて育つて去るぬわう落るが此身の不仕
 合とさう久元と由縁なき浪人として何々ううに言せ
 一と恙気のりやまりとて父母乃目紙くとも隣人悪人と
 くかういふとさうぬ身とさういふと流つて其人の末
 ハ親をよよ吹せ呼向んまうるうぐくも氷くさうさ
 さられと申せまういふとさう月日と悲い言せよたの
 思入其人ハ返初のぬいよ終に屋くともう久元ハ折を切て
 泣きせよとわづれく父母も果多い歎この中れ歎とさ
 いうせんといふ愛思ふうら意申すさうハ女子少くうけが

母乃人々わんも和らぐく此身の上もさう人々も縁じん強
 くも其意をさうばとさういふとさう肉のせんさ今も坊りい
 かせばさうこのたひよりうさう此身とさうと系叔の叔父の存
 向く多い娘とさうて若家多一方へ嫁しきぬ其まも
 死うさう家身とさうり屋家少く家とさうつり小若
 親といふ一人も公の御法として死罪ふさうぬい家
 終とさうさう初めては身よ家申さう一も是宿望の因
 縁とさうんと坊りいれさう此とさうと久佛道入人
 の善哉と申さう外ハおと去らう忘さうとさう捨り
 一娘の事とさうへてあるさうハ中身位乃とさうと申
 うつけて長とさうのうら似らるも坊りもたぬ家もえい捨り

のうー実の親から母より母より母をたがひのりけりーえ
りとして母より母をたがひのりけりーえ
何ぞ涙しそのはるりーと母も守成より何れも母が
うーいーいり涙りーの此無母乃まの人の親の心をやまら
福ももとよむより尼のうまて佛回より無母を救ふつ子
を母へへらよまのいぬるうふと下の句の色より又まをこ
引つけ母さー無母の合うう疑もろまをさううといつと
むせい入母えんは母も母も母也ーとていり河をうり
か此年江底ーと母の色ー母よ達てまうら娘ーとよと
ふうよととりりりー果しうも言多かが漸母えんは母
上香は新巻もよるも其後親と今よ討も仇討といつてー

終るもろく母れは母も其志ーと感て表身の上もろこ
る合秋乃夜まろく泣らうまのりきとつ人も思ふま
是迎へ来り夕アよりの礼謝とまの母えんは母
よ逢ぬるよ母も母も母も感て母も母も母も母も
母の親世音の形引合うとて歌と母も母も母も母も
やまうとんと今出川の初ごとと母も母えんと母も母も
かすも母今出川へ母も母も母も母も母も母も母も
うら母く人の娘も母も母も母も母も母も母も母も
孝行天を通るも母も母も母も母も母も母も母も母も
うら母く日あそびて歌も母も母も母も母も母も母も母も母も
一両日過る母の居も母も母も母も母も母も母も母も母も



の睦まじくくくくいおふーハ来りも色いおえんもいへん候しく念
以て孝行とつてくく候

新左衛門の家の主家と志る話

去り給へ志信新左衛門用事りつてお條へお入り一は大佛乃
見せ
門前へ一甲舎道長大勢つまき一は合一が其中より勢
長候ぬる山一やと志とくるその所りきまきとんと進
るる一は大坂まで西横堀小百屋とて一は茶屋を一勅一忠八つて
てど
も代より新左衛門も志信と志ハ候一やと志る一忠八つて
私りもおね乃一と親方ののりてきい進一は大坂へ入りて古
々の俵坊へ引せ一もきのいふのせりもきいも志一は八年
新左衛門一は心もつてきらお無の百姓の所へ入新しおね不自
然

中より書一席より付ても来久しく住居つてきる大坂よりし

く此度ハ志信より西園へ一合引れつて一は不思議もくく

取自よりくる志信と志新左衛門も志信と志一といふ一は志信と志

ては志信と志一志信の志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

志信と志一志信と志一志信と志一志信と志

其元は伴流の何方に居るまじやと問ふ忠八兼て東海道を
 宿石茶師の間にさるる文村よりよりまると宿立り削村より
 後六よりと物後と名をまじりて一紙に記し其元いつに
 國へゆりや忠八兼て大なる此と人又十日もより下り大坂
 へゆりや血路より一つまはれまじりゆりや一人と眼を
 三列まじりて忠八兼て天もさるる能く一さんまじり有る事
 とも一と物後まじりて一人の天よりまじりて一人の母も
 目録の歌の有家まじりてぬるまじりて血路より下りまじり
 自ら地のごく一問も多しと合するまじりて一人の歌の
 其家まじりて一人の一寸もまじりて三紙に記し遂に一人
 其元もるまじりて彼忠八西國形礼より西國一葉に達する

吐く風のそらにて逐天せんもさるるか一日もまじりて
 して三紙に記し遂に一人の歌の
 其元と眼とを吉日と探ひまじりて一人の歌の
 兩人より削村へ三紙の有家と探る事
 其父の仇中まじりて天にまじりて一人の歌の
 其の有家と探る事不日と探る事一人の歌の
 其元まじりて一人の歌の
 て帰るまじりて一人の歌の
 付てまじりて一人の歌の
 其元まじりて一人の歌の
 下りまじりて一人の歌の



お多
郡左門
弓削村
敵郡蔵
討つ次



まづ紙を懐と違ふとて一と書きて交さく御へまゐらうこれ
 さまと後一秋の日のくまをやくとせつとてさふあはれとらひ
 夕ぐさよの歌乃有家へま紙んとむる勇何よ余人抱もす
 両人引削村へま紙歌と送りしと事

かゝる事 両人のま紙村とてま紙歌と送りしと事
 逸つとて一がふ火ととりと送りし此色の借乗しとてま紙歌
 の歯と引がごとく借入人よ路よふ由法も八幡家の祭礼火勢
 群集つとてま紙歌と送りしと事
 まゝとて村のうらふ入らうとて村六がやせ一家の茶とま紙歌
 と何うも人らうとも足らぬ隣家よま紙歌押尺もま紙歌の由
 てもま紙歌のま紙歌と送りしと事
 一のくまへ今がま紙歌と送りしと事
 なあおえん小ひ内へ端也付とてま紙歌と送りしと事
 へいごさんよとて外面へ待せま紙歌と送りしと事
 一歳ま紙歌と送りしと事
 中下さるべし一門外へま紙歌と送りしと事
 ろげま紙歌と送りしと事
 誰らも何用とてま紙歌と送りしと事
 とうと小歌よま紙歌と送りしと事
 おうとる迎くま紙歌と送りしと事
 一討ま紙歌と送りしと事

一のくまへ今がま紙歌と送りしと事
 なあおえん小ひ内へ端也付とてま紙歌と送りしと事
 へいごさんよとて外面へ待せま紙歌と送りしと事
 一歳ま紙歌と送りしと事
 中下さるべし一門外へま紙歌と送りしと事
 ろげま紙歌と送りしと事
 誰らも何用とてま紙歌と送りしと事
 とうと小歌よま紙歌と送りしと事
 おうとる迎くま紙歌と送りしと事
 一討ま紙歌と送りしと事

くぐりて向未登と切つくる歌危ゆきりと志去さりきり
接合せり子久しむへ切拂ふと寝とせんどい友人を踏色く命は惜
まほふり結ぶおせんがたかきささのさるる中く飲しうく
らうのしうおせんが切さひ刀はうけそや肩ささへ切さよこ
の竹はしとや思ひせん切戸隙やうう一人うけらんきりけり
とアハううう糸倉の面く教十人うの狼藉りのながとまうと何の
やうな別うく馳入る者もけり酒者ふらうて逃るもけり其
強動大ううう此まきさきし歌危はたしと城たさく裏さう
より一人しゆ糸もさきし落させうり石を重き清大巻にて
何ものうさし此不へ踏さ狼藉少なる其伏せんとりり歌左巻
とりりて此所へ隠け押込者清うと家くが為さる親乃

歌さよバ伏へ退てまらあき清と出さきよとつとさきてりうら
りそ流石石を重と動けまき清始終せやせさるるきり
河歌うらとわさしはせさるるしゆ押込はううこは居ら
るや月来まきとさきとあうり採しりまといつて二人も力さ
るよこくとん包しうらあかし志のうらしやさるのせんやと
あき清屋の裏のうこへ刀と抜さううけけりましといふう我
りそきりて尋るよ其妙方とまきし其うらよん物しらつま
りし徳人も列りりおまほふしとまきし河うへ逃うせうり
うや其妙方とまきしと村乃そのとも退りよ立屏やうら
よ友人のきりも綱もさき果然とらまきしよこきて居り
うらるるを清の歌なすつ小向いいうやうの伏しを秘つりそと

秋を去るハ火浣布と改更り新を去るとらせりりぬぐりと落し
 うく吐くはれはまき清模よとらさてくお奇ぬりま
 ねんはらりびだれ物なり糸生團の甲斐の玉とて後を清秋花
 一若よりある人うりう其後之くうら終對面せざりし
 一去年ふと出會うごとくも不仕合國と下らんとのふ
 毒は毒はかりの同たして當時糸生清の村方よと
 此をよとわらるるにの振とせしそのは落志は落志
 まて千辛万苦してきゆく飲よとら合さし討扱は
 余よ功のしるん此中落志うりもまるうりいふ余不し見
 中を殘るよ此人の某うとて志は休息のし
 とそ手かたてとせや一本を逐らうとぬお流中べとせ

よきのりくかりよまきてむついで甲斐も多し期討りら世
 ろいとうさくなく後沈む秋を去るも力なくおれいし今
 のよとれとさくうりとかりひいふおえんと徳志うり
 どのよとれとれと糸らととらまきまきまきまきまきまき
 中へ歸るおねよら雲の上海乃果まで秋葉冷然とら了
 簡らうりしとらるよとてまきまきもそのりて
 へ勇まるともらん秋を去るよきとて色は勝おれ其上の雨人の忠孝
 感心のとてところらとらるよ秋日也此不しとらとらとらとら
 も引合せ村乃そのもよも秋を去る不我と云せせり附るの密
 しまつとてべしとて中へ流しはれしとて答ぬとら
 おえん秋を去るよ糸生一とれとて七九府よ達張



伊勢堂久野
 七九郎 兄 郡 左 五 門 下 達 して
 甚 氣 を 倅 して 同 及 ず



御休所
 福助

何となく勅免下さるるは一とせよも表あ彩ひくる勅免す
 も流石血とらへの不便さよ何とやまけやうら此ぞよて對面を
 かりしもしよめ事と敷るんから其るまも今中何におま
 なくハ陸家業精知一城の人とぬる居一勅免ゆりまも
 おとやんともけうとて換扱して業店を立つまハ七九師
 ハ疎うろとたはまもまごり情るれゆり彩てもらまもた
 ぬ中會や一某ひくハ勅免下さるまもまもまもまもまも
 るゆまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 彩る志一彼屋ぬまも一候一官の途中心もまもまもまも
 いぬりもつとまもまも一何やまもまもまもまもまもまも
 何となくまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも

松坂(用)ゆり序まもまもまもまもまもまもまもまも
 か持一箇風呂一き包るまもまもまもまもまもまもまも
 まも一其敷ハ津の町ハ族者一ぬ彩屋の才ハ風情の彩付て
 まもまも一替りて物やまもまもまもまもまもまもまも
 ろけまのり一思ひまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまもまも七九師ハ勅免下さるるは一とせよも表あ彩ひくる勅免す
 まもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 ぬりまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 思れぬ人ねねぬまもまもまもまもまもまもまもまも
 まもまも天のまもまもまもまもまもまもまもまもまも
 名もまもまも此時清りまもまもまもまもまもまもまも
 名もまもまも此時清りまもまもまもまもまもまもまも

さらし 御意の仙事科石研科を寺人抄りて其の遺るもの
をくちやうのちの良へはともし其の上よりまうく簡そりて
のくちやうのちの良へはともし其の上よりまうく簡そりて
町の落名とまかちの良へてまうく簡そりて

再因高臺梅卷之三

御家御門人

平安中野儀時堂先生等

高家

子紙大全

必用

横綴中 全一冊
大冊

此の書は御家御門人の御用集を以て其の遺るもの
をくちやうのちの良へはともし其の上よりまうく簡そりて
のくちやうのちの良へはともし其の上よりまうく簡そりて
町の落名とまかちの良へてまうく簡そりて

